

生活行為とライフスタイル（Ⅰ）

○神戸松蔭女子学院短大 水島かな江 甲子園短大 永藤清子
北海道教育大岩見沢分校 田中陽子

【目的】ライフスタイルの多様化の流れの中で、これまで用いられてきた職業、年齢、階層等の諸属性だけでは、家族や個人の生活を捉えにくくなっている。その中で新たな指標として、ライフスタイルが注目されてきている。このライフスタイルの分類にあたって、現状では、意識、消費スタイルなど様々な視点から分析されているが、本研究では、日常の生活行為がライフスタイルをとらえる指標として利用可能かどうかを検討する。

【方法】家事的な生活行為と情報収集的な生活行為について、その頻度に関する意識、及び各種行動に対する価値観、家事・ライフコースについての考え方等の質問紙による自記式の調査を1994年7月上旬、及び10月上旬に行なった。調査対象者は京都、兵庫の都市部にある女子短期大学の学生581名である。回収率は100%、有効票581票である。

【結果】(1)家事的な生活行為をどの程度行なったらよいと考えているか、という頻度の視点から分類した。その結果①Ⅰ型（意識されている頻度がほぼ一つに集中しているもの）②Ⅱ型（意識されている頻度が2つあるもの）③Ⅲ型（意識されている頻度が3つあるもの）④Ⅳ型（意識されている頻度が4つあるもの）の4つのタイプに分けられることがわかった。これらのタイプは①から④に行くほど、ライフスタイルの多様化に関連すると考えられる。(2)家事的な生活行為の頻度についての意識を、住居、価値観、母親の職業の違い等で分類し、それぞれ平均値でみたところ、基本的にはそれらの属性等にかかわらず似ていることがわかった。(3)全体としては似ているものの、微妙に頻度についての意識の違いが見られる家事的な生活行為のあることがわかった。